

## はじめに

本発表は、現行コーパスの特徴を指摘し、その制約を発展的に解消する手がかりとして、日本語学習者の用例を通時的観点で分析することの重要性並びにそのような分析を可能とするコーパス構築の可能性について簡略的に提示するものである。

## 日本語学習者の用例を採録した現行のコーパス

- International Corpus of Japanese as a Second Language : I-JAS
- Corpus of Japanese as a Second Language : C-JAS
- 学習者作文コーパス なたね 等

これらはいずれも共時的な誤用分析、中間言語分析を行う上では有効であるが、採録対象の時代的な偏りのため通時的分析は困難。

## 通時的分析の意義

### I. 学習者の言語習得上の通時的な難点の把握

学習者の誤用の傾向の連続性及び非連続性が明らかになることで、より重点を置くべき指導項目を絞り込むことが可能になることが期待される。

### II. 教材・教具等の有効性の検証可能性

学習者の音声的、文法的特性の連続性、非連続性とを併せて考察することで、その時期に中心的に採用されていた教授法、教材・教具がどのような言語上の性質を産み出したのか、そこに2関連性が見出せるのか否か等を実証的に検討することが可能となり、日本語教育史領域に更なる知見の蓄積をもたらさうものと期待される。

### III. 日本語史的な分析可能性

日本語史領域ではこれまで非母語話者の言語的特徴は十分に検討されてこなかったが、この方向付けでの分析も行われる価値があろう。また、領有地にはそれぞれ内地方言の影響が見られるため、方言の展開の一側面としての分析も用例に研究用情報を付加すること等で進展していくものと期待したい。

その他、教育学、歴史学等他の領域でもこの類の知見が援用可能である可能性がある。

## 採録対象の量的・質的な確保の可能性

組織的な日本語教育の萌芽的時期である植民地主義時代の用例は、音声資料の不足のために当時の外地系児童の作文資料が採録対象としては大きな意味を持つ

### <作文資料>

- 新義州高等普通学校作文集『大正十二年伝説集』（1923年）
- 『御大礼記念児童文集』（1929年）
- 『全国小学児童綴方展覧会』（1936年）全6巻 等

その他ガリ版刷りの作文集等を含めると、コーパスとして機能しうる最低限度の言語量は確保できるものとみてよいと思われる。また、教師の手による規範化等の可能性もあるが、その点については資料毎にばらつきがあり、それぞれ検討が必要である。

### <内地人による音声上の報告に関する資料>

- 山口喜一郎(1903) 「国語教授の際に気付きし児童発音の誤りに就きて」（『台湾教育学会雑誌』十七号）
- 官立漢城外国語学校(1911) 『国語の発音及語法に関する調査』
- 寺川喜四男(1939) 『北部台湾に於て福建系本島人の使用する国語のアクセント研究』 等

各種報告が外地系児童の音声をどの程度正確に反映しているのか、という問題があるため、それぞれの質的な精査が急務である。

## まとめ及び今後の課題

上に簡略的に提示した通り、日本語学習者による用例を通時的観点で分析することは、日本語教育史、日本語史等の領域に一定の成果をもたらすものと期待できる。しかし、史的な用例を採集し分析することは現状では多くの労量を費やす必要があり、また、網羅性や量的な妥当性を考えれば調査の困難であることは明白であり、このような現状の解消にはコーパス構築による用例調査の安定的な容易さの担保が必要であると思われる。

他方、採録対象の質的な検討は未だ充分とは言えず、それぞれ慎重に検討を続ける必要があり、これは今後の重大な課題のひとつである。また、OCR技術等を活用しても資料の文字化や言語情報の付加等の点で困難が生ずるため、まずはより多くの人々と問題意識を共有し、協力を得ながらコーパスの構築を目指すことを発表者の課題としたい。 ※発表者が現在構築中である日本語教育黎明期の作文資料を対象としたテキストコーパスも提示予定であったが、技術上の混乱による大幅な見直しが必要となったため今回は見送ることとする。